

清史国際討論会参加記

松 浦 章

去年（一九八六年）七月二五日より二九日までの五日間、中国遼寧省の海港都市大連の棒極島賓館で開催された清史国際討論会へ参加のめた、五年振りに訪中した。

今回の討論会の招聘状は一昨年十二月末に受け、昨年七月初に大連市人民政府弁公室より「邀請書」を得て、大阪中国総領事館において査証許可を得て訪中した次第である。

外国からの参加者は、七月二三日、北京に集合した。日本人参加者は、神田信夫明治大教授、松村潤日本大教授、石橋秀雄立教大教授、細谷良夫弘前大教授、石橋崇雄国士館大講師、加藤直人日本大講師等の諸氏が東京より参加され、中国留学中の東京外大A・A研の中見立夫氏と北京大留学中の京都大院生大澤顕浩氏とは大連で会い、大阪からの筆者を含め九名であった。

日本人以外の参加者はアメリカ合衆国セント大の王業鍵氏、日本広島大の楊啓樵氏、香港中文大の羅炳綿氏とオーストラ

リアのラトベ大学のトーマス・フィシャー氏等であった。

二四日、大連で会った中見・大澤二氏を除き、外国人参加者は、北京師範大学を表敬訪問した。同大学では、歴史系の馬家駿教授と東西方文化研究センター主任の何茲全教授とから師範大の沿革並びに歴史系の組織について説明を受け、特に何教授は最近組織された東西方文化研究センターについて説明された。同センターは『東西方文化研究』を九月に創刊し、同大学の国際交流のセンターとして機能するようである。

同日正午、外国人参加者は北京師範大学より昼食の招待を受け、北海公園内の仿膳飯荘で清代宮廷料理の一端を味わい、同日午後の飛行機で北京より大連へ向った。

大連空港では、中国社会科学学院歴史研究所の周遠廉氏及び遼寧大学の孫文良氏等の出迎えを受けた。孫氏は関西大学交換教授として来日されており、二年振りの再会であった。

二五日、大連の棒極島ホテル内で、午前九時より開会式が

挙行された。

今回の討論会の主催代表である北京師範大学白寿彝校長等の挨拶の他、外国人参加者を代表して神田信夫教授が挨拶された。

神田教授は「清朝史研究は、一七—二〇世紀初に世界の歴史が一体化し、世界史を考える上でも重要である」等の指摘をされた。

その後、二五日以後、次のように討論会が運営された。

二五日 午前 開会式 午後 分科会

二六日 午前 分科会 午後 分科会

二七日 参観 中国人研究者は旅順

外国人研究者は大連市図書館及び市内見学

二八日 午前 分科会 午後 全体会

二九日 午前 全体会 午後 閉会式

分科会は第一部、経済、第二部、政治、第三部、民族・人物、第四部、思想・文化の以上の四分科会であつた。

筆者は、二五日午後は政治の分科会に出席した。司会は王思治中国人民大学教授、朱金甫中国第一檔案館主任であつた。二六日以降は経済の分科会に出席した。同会の司会は葉顯恩広東社会科学院歴史研究所經濟史研究室主任であつた。筆者は両分科会において報告を命ぜられた。筆者は先に中国の學術討論会へ参加した経験から、報告論文「康熙帝と日本・海

舶互市新例」をワープロを使用して印刷し、百部持参した。中国各地の研究者も各々の方法で印刷された論文を持参され、学会中に配布された。

将来、今回の学会の論文集を出版する予定であるが、二・三年かかるため、事前に遼寧社会科学院の『社会科学輯刊』に掲載してほしいと、当編輯部から外国人研究者に要望された。

今回の学会の内容は松村潤教授が『東方学』第七三輯に紹介される予定のため、本稿では筆者の印象を以下述べてみたい。

中国人民大学檔案系章慶遠教授は同氏が現在進められている研究の一端として、錢鋪・當舖・布店・粮店などの官営商業の解明、そして、社会制度の問題解明としての清代史研究の重要性、並びに雍正帝の業績を明らかにする必要性を指摘された。

社会問題に関して、南開大学歴史系の馮爾康教授が「清代社会史」という表現で中国社会生活の状況を解明する必要性を喚起された点は、今までにない新鮮さを感じた。

筆者の興味ある貿易史の分野では、広東省からの研究者が、多くの新しい研究を出されていた。

広東省社会科学院歴史研究所經濟史研究室主任の葉顯恩氏は『明清徽州農村社会与佃僕制』（一九八三年）の著書で我国

でも著名であるが、今回「清代広東水運と社会経済」を提出され清代の広東において外国貿易が発展した背景として珠江三角洲における水運とその経済関係を明らかにされた。

また同研究所の鄧開頌氏は「鴉片戦争前清政府対広東海外貿易的若干特殊政策及其影響」において清代の対外貿易政策における広東の重要性、広東の対外貿易港としての立地条件、広東貿易を支えた珠江三角洲の問題について報告された。

珠江三角洲を含めた広東地区の経済問題については他に中山大学歴史系の黄啓臣副教授、広東社会科学学院歴史研究所の譚棣華氏、同所の蔣祖縁氏等が次の報告をされている点が注目された。

黄啓臣氏「清代前期農業生産的發展」

譚棣華氏「明清時期佛山經濟繁榮的原因」

蔣祖縁氏「清代前中期広州的対外貿易与

広州城市文明發展的關係」

いずれも清代広東地域の経済問題に関する報告であり、複数の専門家が同一地域の研究に一九となつて進められているところに、中国人研究者の強みを感じた次第である。

以上の広東省の研究者から、本年十一月に広東省で、清代地域経済研究の国際学術討論会を開催する予定であることを教えられた。

各氏等は右の事情もあつて共同研究されているようであつ

た。

討論会終了後、外国人参加者は全員三十日、大連を離れ沈陽に赴いた。

沈陽では筆者は、遼寧大学日本研究所の招待を受け、遼寧大学外事処の宿舎に滞在した。三十一日、午前は他の参加者と共に、遼寧省檔案館を見学した。同館で閲覧を希望していた「朝鮮国王来書簿」は現在所在不明とのことであつた。

三十一日午後、日本研究所主催の座談会がおこなわれ、任鴻章所長の司会により、筆者の専攻する、清代の日中関係史を中心に、同研究所の諸氏と意見交換した。

沈陽滞在中、東陵（ヌルハチの墓）、北陵（ホンタイジの墓）、新楽遺趾出土展示館（同遺趾は約七千年前のもの）を他の討論会参加者と伴に見学し、また任鴻章所長等の案内で沈陽故宮を見学した。

八月三日、沈陽より飛行機で筆者一人北京へ戻り、北京師範大学のお世話で北京郵電学院の招待所に宿泊した。

三日午後より五日の帰国まで、中国社会科学院歴史研究所清史研究室の馮佐哲氏の案内を受け、三日夜は中国中日関係史研究会常務理事汪向榮氏宅を訪問し懇談した。

翌四日、馮氏の案内で歴史研究所を訪問し、研究室、図書室等を見学し、図書室では同所副所長の李学勤氏と再会した。李氏は一昨年十一月より約一か月半、大庭脩教授の招聘によ

り関西大学に來學されていた。

その後、馮氏の案内で中国第一檔案館を訪問し、大連の学会で会った朱金甫氏を始め、俞玉儲、徐藝圃、呂堅等の諸氏と懇談し、朱氏から、『康熙起居注』三冊に続いて、『雍正起居注』三冊、『乾隆起居注』六冊以上の刊行予定の計画があることの教示を得た。そして、同館の特別陳列室において、清代の第一級史料の各種の貴重な檔案を閲覧させてもらった。

さらに、馮氏の案内で紫禁城出版社を訪れた。同社は『故宫博物院院刊』（季刊）、『紫禁城』（隔月刊）等を出版しており、同社編輯の汪萊茵女士は筆者の突然の來訪を歓迎して下さった。それは先に筆者が発表した「乾隆南巡と日本—船載資料を中心—」（『阡陵』№12）を馮氏が『紫禁城』一九八六年第六期、第三七期）に紹介される予定になっていたためであった。

馮氏はさらに北京故宮を案内して下さった。その上同夜、同氏宅に招待を受けた。思いがけず北京の市民生活の一面を見せていただく機会を得たのである。同氏宅に來訪中の北京市社会科学歴史研究所閻崇年所長、中国歴史博物館の劉如仲氏等とも懇談した。両氏とも大連の学会で会った人々で、今後の學術交流を約した。

わずか十四日間の中国滞在であったが、今まで學術雜誌等でしか名の知り得なかつた多くの清代研究者と邂逅でき有意

であった。

今回の訪中に際しお世話いただいた周遠廉氏、遼寧師大の朱誠如氏、北京師大の關係各位、さらに遼寧大学の孫文良氏、任鴻章氏、日本研究所の各位、遼寧社会科学院の謝肇華氏及び北京滞在中、いろいろ御配慮いただいた馮佐哲氏等に末筆ながら謝辭を述べる次第である。

註

① 松浦章「香港・中日文化交流國際研討会及び中国・東北地区中日關係史研究會參加報告記」（『史泉』五五号、一九八一年三月）。

② 松浦「清に通報された『島原の乱』の動靜」（『関西大学東西學術研究所紀要』一九輯、一九八六年三月）。

（関西大学助教授

